

# マックスのクリスマスの悩み—第21日目

## マックスとパドレイクさん



「ぼく、クリスマスをめちゃくちゃにしちゃったんだ。」 マックスとパドレイクさんが、オリーブグローブ老人ホームのロビーにすわって話していた。二人の片側には、LED懐中電灯の入った箱、反対側にはジェリーツイストの袋がある。ろうかの方からは、古そうなPAシステムから「聖なる夜」のメロディーが流れてくる。タリー一家はその日、オリーブグローブ老人ホームを訪問して、昼食時間にカフェテリアでクリスマスキャロルを歌った。AJもいっしょに来たけど、マックスとはまだ口をきいてくれない。マックスはついに、ずっとパドレイクさんに教わりたいと思っていた、LED

懐中電灯でレーザー銃を作る方法を聞いた。だけど、今となっては、考えられることといったら、自分がどんなにイヤなやつだったかばかりだった。「みんな、ぼくのこと、おこってるんだ。」

「まさか、みんなじゃないぞ。」パドレイクさんは、手ににぎった赤と緑のキャンディを振って言った。「わしは、君のことをおこってはいないぞ。ほかのだれが、わしに何箱も何箱もジェリーツイストを持ってきてくれるかいの？」

「じゃあ、ぼくのことを気にかけてくれるはずの人たちは？」

「君の誕生日のことで悩んでるんだね？」

「うん。・・・ぼく、家族に気にかけてもらいたくて・・・忘れられなくなかったんだ。クリスマスがぼくの誕生日でもあるってことをね。だけど、今はみんな、ぼくのことをさけてるんだ。ぼくは一生懸命だったんだけど、きっと、最悪の誕生日になっちゃうよ。」

「わしがちい小さかったとき時からは、もう何十年も何十年もたっておるが・・・」 そう言ういと、パドレイクさんはジェリーツイストをもう一つ、口に入いれた。「・・・やはり、かくじつ確実に愛を見つあける最高さいこうの方法ほうほうとは、愛をいっぱいばらまくことじゃな。それも、しよっちゅうじゃ！ 君はきみやさしい男の子おとこだし、こ両親も君を愛りょうしんしとる。きつと、すばらしいことけいかくをご計画けいかくなさつとるさ！」

マックスは、自分の誕生じぶんパーティーの計画けいかくは自分いですとは言い張はったことで、それをめっちゃくちやにしてしまったことをパドレイクさんには言いいたくなかった。

「わしは自分の子どもたちを愛あしておる。だから、子どもたちのためならなんでもするぞ。」とパドレイクさんが言いった。マックスは、パドレイクさんの家族が遠くに住すんでいて、休暇中も普通は来きゆうかられないことを思おもい出だした。

「パドレイクさんの家族は、クリスマスかぞくの日ひには会あいに来くるの？」

「いいや。だが、わししんばいのことは心配きみないさ。君には考かんがえることがたたくさんあるからの。」

「もう、どうでもいいんだ！ すばらしい日ひにしようとはしたんだけど、みじめな気持きもちちなんだもの。AJは、もうぼくと口もきくちいてくれないし。また前まえにもどもって、全部ぜんぶやり直なおせたらなあ。」

「できるとも！ 前まえは何なにがクリスマスとくべつを特別かんがなものにしたのか、考かんがえてごらん。そして、それを今いまからするんじゃ。今日きょうから始はじめるのじゃよ。急いそがんと。クリスマスはもうすぐ終おわってしまうからの。だがな、君は自分のためきみに誕生じぶん日たんじょうびクリスマスツリーを考だえ出だしたくらいじゃ。発はつめい明さいのうの才能がある！ このくらいこのくらいのことはううまくややってのけるさ。」

老人ホームから帰かえるとちゅう、マックスはパドレイクさんが言いっていたことかんがについて考かんがえていた。やっぱり、みんなが自分の誕生じぶん日たんじょうびのことを気きにかけてくれたらなあとは思おもったが、自分の計画けいかくはどうやらうまくいいきそうにない。それに、自分の家族かぞくと親友しんゆうのクリスマスクリスマスをめっちゃくちやにしてしまったことで、マックスはすすまない気持きもちちだった。

(時間じかんはあまり残のこっていない。けど、すすべきことはたたくさんあるんだ!)とマックスは思おもった。みんなとの関係かんけいを取りもどさなくちや・・・。マックスはそう決けつ断だんした。

つづ  
続く・・・

文：R.A. ワッターソン 絵：松岡陽子

Copyright © 2011年、ファミリーインターナショナル

"Max's Christmas Trouble, Day 21"--Japanese

<http://www.mywonderstudio.com/level-2/2011/12/20/maxs-christmas-trouble-day-21.html>